

令和7年度豆類需給安定会議、令和7年度豆類産地懇談会 第71回豆類生産流通懇談会の開催について

豆類の生産・流通・加工等に関係する者が一堂に会し、主産地十勝の作柄を調査するとともに、今後の豆類の需給状況に関する情報・意見を交換し、道産豆類に対する理解をより一層深め、豆類の生産・流通の安定と消費の維持・確保を図ることを目的として、(公社)北海道農産基金協会、全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の3者の共催により、令和7年度豆類需給安定会議、令和7年度豆類産地懇談会、第71回豆類生産流通懇談会の合同会議が9月4日(木)に北海道帯広市で開催されました。

1 現地作況調査

会議の開催に先立って、まず、午前中に十勝農業試験場(芽室町)及び帯広市のほ場で小豆、大豆、手亡及び金時の生育状況の現地調査が実施され約40名が参加しました。



- (1) 十勝農業試験場 (小豆、いんげん、手亡)
- (2) 帯広市富士町 牧村氏ほ場 (小豆、金時、大豆)

今回の調査では十勝農試ほ場を視察し、担当研究員から説明を受けました。また、牧村氏ほ場では、牧村氏及び十勝農業改良普及センターの担当者から作柄の説明を受けました。

2 合同会議

午後からは、ホテル日航ノースランド帯広において、合同会議が開催され、豆類の生産・流通・加工業界・行政・試験研究等の関係者約70名が出席しました。



(1) 来賓挨拶

主催者挨拶の後、来賓の農林水産省農産局穀物課山崎課長補佐から挨拶も兼ねて、豆類の現状と課題や農林水産省の支援策などについて説明がありました。

(2) 話題提供

本年産の豆類の生産状況、需給動向、試験研究動向などについて、次のとおり話題提供が行われました。

- ① ホクレン農産部松村雑穀課長から本年産の道産豆類の生育状況等について説明がありました。
- ② J A芽室町西谷農産部長から町内農作物の作付状況及び芽室町内の豆類の生育について、「小豆は6月の高温により草丈は徒長気味、着莢数は平年並みだったが、9月に着莢数がやや減少し、やや不良と判断している。」との説明がありました。
- ③ J A本別町市村農産部長から町内の生育状況について、「小豆はほ場間格差があるものの平年並み。高温による花落ちが確認されている。8月8日に雹が降り豆類に被害があった。強風による倒伏もあり、収穫ロスが懸念される。」との説明がありました。
- ④ J A女満別町浅井経済部長から町内の生育状況について、「小豆は8月25日頃から黄化が始まった。開花期に高温の影響があったところとそうでないところでは着莢数に格差がある。金時は「秋晴れ」が作付の9割近くで、収量は期待できそう。」との説明がありました。
- ⑤ 十勝農試豆類畑作グループ堀内主査から試験研究動向について、小豆の育種目標として、最優先事項は「コンバイン収穫適性の向上」である。次に、「障害抵抗性の付与」として、高温障害に対する抵抗性の取り組みを開始した。

小豆新品種「きたいろは」は耐倒伏性は「きたろまん」と同等。新品種認定から栽培開始まで一般的には3～5年かかる。

「舞てぼう」は「雪手亡」に比べて、収穫時期に降雨があっても汚粒が発生しにくい。

ガラス室を35度の高温にして花落ちするか試験をしている。花落ちしにくい品種はありそうだと期待している。との説明がありました。

- ⑥ 日中経済協会北京事務所山田副所長から現地で見た中国の豆類生産の実態について、次のとおり説明があった。

- ・中国では小豆があまり重要視されていないため、生産量が少なく、小豆を使ったお菓子もほとんどない。
- ・中国の試験研究機関では技術指導や品種改良も行っていないため、生産者が自分で試行錯誤した技術があるだけ。
- ・小豆はとにかく省コスト（除草しない。肥料をやらない。）で生産する。

（３）意見交換

全国豆類振興会藪広報委員長をコーディネーターとして、本年の生育状況、需給見込、試験研究動向等を踏まえ意見交換が行われました。

意見交換で出された主な意見は次のとおりです。

【生産状況】

- ・小豆の生産面積を増やそうと努めているが、収穫量が安定しないと、供給に不安が出る。「きたいろは」のようなコンバイン適正のある品種で生産量を増やすことが現実的な対応。

【原料調達、実需者の声】

- ・カナダでは２万トン前後の生産量で日本が必要な分を作っている。
- ・カナダの作況は手亡も小豆も昨年同様良い。
- ・アルゼンチンは小豆の作付が少ない。豆類の耕作面積は７７０万ヘクタールで、その８割がいんげん。
- ・実需者が減少している。その理由としては高齢化、新規設備投資が出来ない、原材料の高騰などにより廃業している。
- ・製餡業者は１，３００社から３００社まで減少。こし餡は日持ちしないので苦労している。
- ・小豆の生産量を確保して頂きたい。また、生産者にある程度利益がないとダメ。北海道産 ３５，０００円/俵、カナダ産 ２４，０００円/俵、中国産 １８，０００円/俵くらいの価格差が丁度良い。
- ・小豆は毎年味が違うことをエンドユーザーに伝えることが大事。品種の違いや輪作することとも知られていない。業界として「今年の味はこんな味です。」と伝えていくことも必要。
- ・東京地区の和菓子屋に売上を聞き取りしたところ、約１割が増加、約７割が横ばい、約１割が減少と回答があった。（堅調に推移）
- ・和菓子作りには北海道産小豆は必須なので、今後も作付面積増加をお願いしたい。
- ・煮豆業界は大正金時が中心。
- ・金時は生産者にとっては作付けしたくない作物だが、秋まき小麦の前作として「秋晴れ」に期待しているところ。
- ・北海道の豆は美味しいので消費者から支持されている。

【小豆増産への課題】

- ・生産者が再生産可能な価格設定の環境が必要。コロナ禍では２万円を切ったが、今は４万円。しかし生産コストも高騰。生産者手取りが増えていない。
- ・今後の対策としては作業の省力化や品種改良が必要。行政には種子への支援を要望。
- ・大豆は小麦のコンバインで収穫できるので、作業省力化が可能あり、生産者受けが良い。
- ・十勝管内では、大豆や小豆が９月半ばに収穫できるようになれば、秋まき小麦の前作として、作付けが増加する可能性はある。

【高温対策】

- ・育種は時間が掛かるため、高温対策として直ぐに出来ることとしては、播種時期の分散が考えられる。科学的知見を重ねて、情報発信したい。
- ・開花期高温抵抗性評価法の検討を行っており、高温でも花落ちしない品種を探している。密植で暑さに当たらないようにするアイデアもある。

【その他】

- ・生産者、実需者が相互理解することにより、良い関係を築けるよう、これからも連携強化を期待する。